

# オンジエ通りの怪

シェリダン・レ・ファニュ



ぼくの話は人に語って聞かせるような価値など——少なくとも紙に書いて読んでもらう価値などありません。これまでに話をしてくれるよう頼まれたことは何度かあります。実際に今回も、家の外では冷たい風が悲しげな音を立てて吹き、家の中ではすべてが快適で心地よい、そんな冬の晩に夕食を終えてから、申し分のない暖炉の火に照らされた聡明で熱心な皆さんの顔に囲まれ、こうやって語り始めてみると——自分で言うのもおこがましいのですが——滑り出しは上々だと言えます。とはいえ、皆さんの希望どおりにしようとするれば、それは勇気が必要となります。ペンとインクと紙は驚異的なことを伝えるには興ざましの道具ですし、読み手というのは聞き手よりも明らかに批判的な生きものなので、から。しかし、日が暮れてから読むようにと、皆さんが友だちに勧めてくださいるのであれば——ゾクゾクするような得体の知れない恐怖の話が、しばし炉端の座談で問題になるようなことがあれば——それはまた話が別です。要するに、皆さんが語るべき絶対の時<sup>モットリアーテンボフファンデー</sup>(1)を確保してくださいるならば、ぼくは自分の仕事に取りかかり、勇気を出して自分の語りたいことを語るつもりです。では、そうした条件を前提とし、これ以上は無駄口をたたかず、怪事件の経緯をすべて簡潔に語ることにいたしました。

従兄<sup>いとこ</sup>のトム・ラドロウとぼくは一緒に医学の勉強<sup>(2)</sup>をしていました。医者という職業に留まっていたならば、たぶん彼は成功していたでしょう。ですが、イングランド教会<sup>(3)</sup>の牧師の方に鞍替えしてしまい、その義務を立派に果たしている際にかかった伝染病の犠牲

となり、残念なことに若死にしまったのです。さしあたり、彼の性格については、落ち着きがある一方で、ざつくばらん明るい男だったと言え、それで十分でしょう。嚴格に真実を貫き、ぼくのような性格——興奮したり、神経質になったりする気質——はまったく持ち合わせていませんでした。

ぼくたちが大学の講義に出ている頃だったでしょうか、ラドロウ伯父さんが——トムの父親ですが——オンジエ通り<sup>(4)</sup>の古い屋敷を三、四軒ほど購入し、そのうちの一つが空き家になっていました。この伯父さんは田舎に住んでいたもので、その空き家に借り手がない間は、自分たちの住まいにしようじゃないかと、トムが言い出しました。そこに引越せば、講義のある教室だけでなく娯楽場の近くでもあるし、下宿の家賃を毎週払うことから解放されて、願ったり叶ったりじゃないかというのです。

ぼくたちが持っていた家具は実に乏しく、身のまわりの品も質素で基本的なものばかりでした。要するに、ぼくたちの住まいの備えは、ほとんど野宿同然に簡単なものだったのです。従って、ぼくたちは新しい計画を立てると、すぐ実行に移しました。表側の客間がぼくたちの共通の居間、その上の二階の部屋がぼくのもの、同じ二階の裏側の部屋がトムのものとなったわけです。ですが、どんなことがあっても、ぼくはその裏側の部屋を使用する気になれませんでした。

最初に言っておく必要がありますが、これは非常に古い屋敷でした。五十年ほど前に正

面だけが新築された感じでしたが、この部分を除いて現代風に見えるところは全然ありません。この屋敷を伯父さんのために買って権利書を調べてくれた代理人から直接聞いた話では、たぶん一七〇二年だったと思います。これは没収された他の多くの財産と一緒にチチエスター・ハウス<sup>(5)</sup>で売却された家でした。もともとはジェイムズ二世<sup>(6)</sup>の時代のダブリン市長であったサー・トマス・ハケット<sup>(7)</sup>が所有していたのだそうです。売却された当時、築何年になっていたかは分かりませんが、いずれにせよ長い年月の間にいろいろと変化した結果、今では古い大邸宅によく見られるような、好奇心をそそると同時に気をめいらせるような、謎めいていて悲しみに沈んだような、そんな雰囲気醸し出していました。

装飾の細かい部分を当世風にリフォームするようなことはほとんどなかったようです。その方がおそらくよかったです。というのは、まさに壁や天井、扉や窓の形、暖炉の前の風変わりな対角面、梁や重厚な蛇腹<sup>(8)</sup>には、何か過去と結びついた異様な感じがあつたからです。言うまでもないことですが、階段の手すりから窓枠に至るまで、ごまかしを絶対に寄せつけず、現代の美装や上塗りをいかに多用してみても、その古さをはつきりと示してやまない、そうした非常に頑丈な木の工芸品についても、過去と結びついた異様な雰囲気がありました。

実際には、客間に壁紙をはる程度の改修がなされていたのですが、その壁紙はどういう

わけか寒々として場違いな感じがしたそうです。隣の横町で小さな泥まんじゅうのような店を営んでいる老婆が、その壁紙のことを覚えていました。ぼくたちが雇った女中は、この老婆の娘——とはいえ、五十二歳の老嬢——だけでしたが、彼女は夜明け時にやって来て大広間でティーの準備をすべて済ませると、すぐまた静かに退室して行きました。その彼女の母親から聞いた話では、当時ハロックスという（「首吊り判事」という評判が立っていて、検死陪審<sup>(9)</sup>の評決によれば、最後は自分自身が一時的な狂気に駆られ、子供の縄跳び用のロープを大きな古い階段の手すりにかけて、首吊り自殺をした）老判事がここに住んでいて、すばらしい鹿肉と上等の古いポートワイン<sup>(10)</sup>で友だちをもてなしていたそうです。そんな黄金時代<sup>(11)</sup>には、実際に広々とした客間の多くは、金箔をかぶせた牛革が壁にかけられて、さぞかし異彩を放っていたことでしょう。

寝室の壁はすべて板張りです。表側の寝室は気持ちいを暗くさせるようなところがなく、居心地のよいたたずまいのせいでしょうか、陰気なものを連想させることも全然ありません。しかしながら、裏側の寝室の方は違います。不思議な位置にあつて人を憂鬱にするような、そんな二つの窓がベッドの足もとをぼんやりと見つめ、ダブリンの古い屋敷によく見られる壁龕<sup>(12)</sup>が、幽霊の出そうな大きな収納部屋——陰影相和<sup>(13)</sup>すという点で裏側の寝室と融合し、仕切りが溶けてなくなつたような収納部屋——みたいに見えました。夜中などは、この引っ込んで奥まった場所——ぼくたちの女中はよく「アルコーヴ」と呼んでいま

した——が、ぼくの目には何かい<sup>わ</sup>く<sup>わ</sup>く<sup>わ</sup>ありげで、とても不気味な性質を帯びて見えたものです。このトムの寝室では、たった一本しかない弱々しげなローソクが、その暗闇を照らすと無駄な努力をしていました。そして、そこでは真つ暗な壁龕がいつも恐ろしい目でトムをにらんでいたのです——もつとも、そこは常に光線の通らない場所でしたが。とはいえ、このような印象は部屋おむきの趣の一部にすぎません。どういうわけか分かりませんが、ぼくはこの部屋全体に嫌悪感を覚ええました。その大きさや形状には、目に見えない不調和——何か不可解で筆舌に尽くしがたいもの——しつくりしていて安心できると密かに思えるような、そんな感覚とは何となく相容れない、どことなく疑心暗鬼を生じさせるような雰囲気があったからです。総合的に考えた結果、ぼくが最初に言いましたように、どんなことがあっても、こんな場所では一晩だつてひとりで過ごす気になれませんでした。

このように迷信にとらわれる自分の弱点をトムから隠そうなどという気もありませんでした。一方、トムはぼくの不安を心の底から馬鹿にして笑っていました。これから皆さんにお聞きいただくように、この懷疑論者も自分の経験から教訓を得るように運命づけられていたのです。

双方がそれぞれの寝室を占有するようになって間もなく、ぼくは眠れぬ夜と安眠妨害について不平を漏らすようになりました。元来ぼくは熟睡タイプで、悪夢にうなされるようなことは全然なかったので、こうした不快なことに一層いらだっていました。しかし、毎

晩いつものような休息をとる代わりに、「しこたま恐怖を味わう」<sup>(13)</sup> ことが、ぼくの運命となったのです。手始めに恐ろしい不快な夢を連続して見たあと、ぼくを悩ませていたものはつきりとした形をとるようになりました。細かい点ではどれも大した違いがないような、そんな同じ幽霊の訪問を最初の週に少なくとも（平均すると）二晩に一回、受けるようになったのです。

さて、この夢、悪夢、我慢ならない夢幻に——何と呼んでも結構ですが——以下のように、ぼくはみじめにも翻弄されてしまいました。

その時は真つ暗だったのですが、ぼくのいた部屋のすべての家具と雑然とした配列が、この上なくいまわしいことに、はつきりと見えた——いや、見えたような気がしました。ご存知のように、こんなことは普通の悪夢にありがちなことです。ところで、このように何でも見通すことができる状態というのは、さながらライトアップされた舞台の上で単調な恐怖の劇的場面<sup>(14)</sup> が披露されるのを見るのに似ています。おかげで、幾晩かは耐えられない時を過ごすはめになりました。そんな状態で、なぜか分かりませんが、ぼくの注意はベッドの足もとと向かい合ったところにある窓にいつも釘づけになったのです。そして、ぼくはいつも同じ影響を受け、何か恐ろしい予感にじわじわと、しかし確実にとらわれていききました。

理由は判然としませんが、何か漠然とした恐ろしいことが、どこか見知らぬ場所で、あ

る見知らぬ仲介者によって、ぼくを苦惱させるために着々と準備されているような、そんな気がしていたのです。すると、ある間隔をおいて——ぼくにはいつも同じ長さに思えたのですが——突然、一枚の絵が窓のところに飛んできて、まるで静電気を受けたように、そこにへばり付いてしまい、それからぼくにとつて恐怖の試練が始まりました。たぶん数時間は続いたはずです。この窓ガラスに付着した不可解な絵は、絹でできた深紅の花柄の部屋着をはおった老人の肖像画でした。ぼくはその服の折り目を今でも詳しく説明することができません。老人の顔つきは奇妙に混ざり合った知性と肉欲と権力を具現化していただけでなく、そこにはさらに邪悪で不吉な兆しもたくさん見て取ることができました。かぎ鼻はハゲワシの嘴くちばしのようです。二つの目は大きく、灰色で、飛び出していて、人間とは思えない残酷さと冷酷さで、ギラギラと輝いていました。こうした顔の上に深紅のビロードの帽子が載っていて、その下からチラッと見える髪の毛は、老齢のために白くなっています。眉毛の方は本来の黒さを留めていました。ぼくは石のように非情な顔しむの皺、色合い、陰りをどれもよく覚えています。それも無理はないのです！身の毛のよだつ顔にじつと凝視され、何時間にも思える苦悶を味わいながら、どういふわけか悪夢に魅せられたように、ぼくもまたじつと凝視していたからです。ですが、とうとう——

雄鷄おんどりが鳴いたので、消え去ってくれました—— (15)



夜の恐ろしい監視を通して、ぼくを金縛りにしていた、あの悪魔は。そうしてやっと、ぼくは苦しみもだえながらも、日々の務めがあつたので起床したわけです。

この夜の苦悩の実体を親友のトムに詳しく説明するのは、いやでたまらないことでした。理由ははっきりと分かりませんが、悪夢の中で去来する不思議な幻影が、激しい苦悶や氣味の悪い恐怖について受けた強烈な印象と結びついていたからかもしれません。しかし、いまわしい夢に悩まされていることについて、ぼくは漠然とした形で彼に話してやりました。そして額を寄せ合つて相談し、真偽が疑わしい医学的な唯物論<sup>(16)</sup>に従い、呪術ではなく強壯剤を使うことで、恐怖を追い払うことにしたのです。

ぼくは素直に認めますが、この強壯剤は実に効驗あらたかで、そのせいでしょうか、いまましい肖像画の出現が次第に途絶えるようになりました。これはどうしたことでしょうか？ 結局、この奇妙奇天烈な幽霊——恐ろしいだけでなく個性的でもある幽霊——は、ぼくの空想の産物だったのでしょうか？ それとも、胃の調子が悪いせいで見えたものでしょうか？ つまり、あれは（当時の専門用語を借りれば）主観的なものにすぎず、外部の第三者によるあからさまな攻撃や侵入の結果ではなかったのでしょうか？ そういったことは、皆さん、ぼくたちが共にあとで認めることになるように、決して起こりはしなかつたのです。あんな肖像画の形をとつて、ぼくの五感を金縛りにした悪霊のやつは、同じように近くにおいて精力的に活動し、こちらに悪意を抱いていたのかもしれない——もつとも、

ぼくには、やつの姿が見えなかったのですが、自分の体調をちゃんと維持し、酒を飲まずに節制しておれば、啓示宗教<sup>(17)</sup>の道徳律など問題になることはないでしょう。物質界と霊界との関係は瞭然として明らかなのです。すなわち、身体組織が健全な状態で、そのエネルギーが損なわれていなければ、ぼくたちはいろんな悪影響に対して自己防衛できるかもしれません。そうでない場合は生活自体が恐ろしいものになってしまふのです。催眠術師<sup>(18)</sup>や電気生物学者<sup>(19)</sup>も、平均すれば十人の患者のうち九人に対しては失敗するのです。だから、悪霊だつて同じかもしれません。ある種の霊的な現象が生じるには、身体組織が特別な状態にあることが絶対必要なのです。そういった活動は時には成功し——時には失敗する——それだけのことです。

これはあとから知ったことですが、懷疑論者を自認していた親友もまた、どうやら悩みを抱えていたようです。とはいえ、その頃のぼくはまだ何も知りませんでした。ある晩のこと、ぼくは珍しく熟睡していましたが、突如として寢室の入り口の部屋で足音がしたので、目を覚ましてしまいました。そして、その足音にすぐ続いて、大きなガランガランという音が聞こえたのです。あとになってから、その音は大きな真鍮製の燭台が原因だったと分かりました。哀れなトム・ラドロウが力を込めて階段の手すり越しに投げた燭台が、もう一つ別の階段をはね返りながら転がり落ちて行く音だったのです。これとほとんど同時に、トムがいきなり扉を開けて、ぼくの部屋へ後ずさりして飛び込んできました。彼の

興奮たるや尋常ならざるものでした。

ぼくはベッドから飛び出て、自分がどこにいるかもはつきりと分らないまま、彼の腕をつかんでいました。そこで、ぼくたちは——シャツ姿のまま——開いた扉の前に立ち、向かい側の大きな古い階段の欄干を通して、雲のかかった月の青白い光がかすかに射し込んでいた入り口の部屋の窓を見つめていました。

「どうしたんだ、トム？ どうかしたのか？ いったい全体どうしたんだね、トム？」不安でいららしていたぼくは、彼をゆさぶりながら問い正しました。

彼は深呼吸してから返事をしましたが、あまり筋の通った返事ではありませんでした。

「何でもない、まったく何でもない——ぼくは何か——何か言ったかい？——リチャード、ローソクはどこだ？ 真つ暗じゃないか。ぼくは——ぼくはローソクを持っていたんだぞ」

「ああ、真つ暗だよ。でも、どうしたんだ——ホントに何事だね？——話してくれ、トム——

——気でも狂ったのか？——何事かね？」

「何事かねだつて？——ああ、すべて終わった。あれは夢だったに違いない——夢以外であるはずがない——そう思わんかね？ 夢じゃないなんてことはありえんよ」

「もちろん」と、ぼくは途徹もなく不安になりながら言いました。「実際に夢だったのさ」

「ぼくの部屋に誰か男がいると思ったんだ。で——それで、ベッドから飛び出たのさ。で

——それで、ローソクはどこ？」

「君の部屋だよ、たぶん。取ってこようか？」

「いや、ここにいてくれ——行かないでくれ。何でもないんだ。行かないで、お願いだ。すべて夢だったんだ。扉に錠を下ろしてくれ、ディック、お願いだ。君と一緒にここにいるからさ——不安なんだ。だから、ディック、後生だから、君のローソクに火をつけて窓を開けてくれ——お話にならない状態なんだ、ぼくは」

頼まれた通りになると、彼はグラニューエイル<sup>(20)</sup>のように毛布を一枚まとして、ぼくのベッドのすぐそばに腰を下ろしました。

誰でも知っていることですが、どんな種類であれ、恐怖というものは伝染しやすいものです。トムが苦しんでいた特別な種類の恐怖はとりわけそうでした。このように彼をふがない男にしてみました、見るも恐ろしい幻影の詳細については、世界を半分やると言われても、その時だけは聞く気になれませんでした。彼もまた繰り返し話したくはなかったことでしょう。

「君の馬鹿げた夢のことなんか、話してくれなくなつて構わんよ、トム」と、ぼくは軽蔑を装いながら言いましたが、内心は恐怖におびえていました。「別のことを話そうじゃないか。でもね、この汚い古屋敷がぼくたちの体質に合わないのは確かだ。消化不良とか——えーっと——寝苦しい夜とかに悩まされてまで、誰がこんなところに長居なんかするもんか。だから、ぼくたちは新たに下宿を探した方がいい——そう思わんかね？——すぐ

にも」

トムは同意してくれ、しばらくして言いました――

「リチャード、ぼくは考えていたんだけど、おやじと最後に会ってからずいぶん時が経つから、明日ちよつと田舎へ会いに行つて、一日か二日で戻つてくることにするよ。だから、その間に君が新しい部屋を借りておいてくれよ」

こうした決心が幻影にひどくおびえた結果であることは明らかでしたが、その決心もたぶん翌朝になれば夜の闇や露と一緒に消えるだろうと思ひました。ところが、それはぼくの勘違いでした。ぼくが適当な下宿を見つけたら、トムの訪問先であるラドロウ伯父さんのところにすぐ手紙を出して呼び戻すという合意のもと、彼は薄明に起きて田舎に向かつて出発したのです。

さて、ぼくも住まいを変えたいのは山々だったのですが、偶然ちよつとした遅れや思いがけないことが連続して起こつたので、賃貸契約が済んでトムを呼び戻すための手紙を出すまでに、一週間が経過してしまいました。その間にささいな事件がいくつか（語り手である）ぼくの身に起こつたのです。今となつては遠い昔のことなので馬鹿らしいことと思えますが、そういった事件のせいで、当時は本当に早く引越したいという気持ちに駆り立てられていました。

竹馬の友が出立して一日か二日した晩のこと、ぼくは部屋の扉に錠を下ろして、暖炉の

そばに座っていました。ガタガタする三脚台の上には、大きなガラス容器で温かいウィスキーのパンチ<sup>(21)</sup>を作るための材料が置いてありました。それは、ぼくを取り囲んでいた

黒、白、青、ネズミ色の幽霊たち<sup>(22)</sup>

を遠ざけるのに最善の方法、つまり、偉い先祖たちが推薦してきた方法を採用し、「体にお酒を入れて体から元気を出す」<sup>(23)</sup> ためのものでした。ぼくは解剖学の本を脇に投げてしまったあとで、パンチを飲んで寝るのに先立って例の強壯剤を飲みながら、『スペクテイター』誌<sup>(24)</sup>を五、六ページほど読んでいました。ちょうどその時のことです。屋根裏部屋から降りる階段のあたりで足音が聞こえました。それは夜中の二時のことで、外の街路は教会墓地のように静まり返っていました。ですから、その足音ははっきりと聞き取れました。狭い階段を上から降りてくる、そのゆったりした重い足音には、老齢のせいか緩慢な動きで大きな音を出してしまうような特徴がありました。この足音のさらに奇妙な点は、ドシンという音とパタツという音の中間のような——耳にするだけでも恐ろしい——音から推測するかぎり、音源の足が間違はなく裸足<sup>はだし</sup>であったということです。

女中は何時間も前に帰ってしまい、この屋敷に用があったのはぼくだけです。そのことはよく分かっていました。階段を降りてくる男に、足音を隠すつもりが全然ないこともま

た明らかでした。それどころか、まったく不必要なほど大きな音を立て、わざと慎重に歩を進めたがっていたようです。ぼくの部屋を出たあたりまで、すなわち階段の一番下まで到達すると、その足音は急にピタッとやみました。ぼくは今か今かと待ち受けていました——部屋の扉が自動的に開き、いまましい例の肖像画のモデルが入ってくるのを。しかし、数秒後に足音がまた聞こえ始めたので、ぼくはホッと胸をなでおろしました。それは前と同じような動きです。奥の客間の方につながっている階段の部屋を通り、そこでもたしばらくストップしてから、もう一つの階段を降りて玄関の広間の方へ行き、そこからは何も聞こえなくなりました。

さて、足音が聞こえなくなるまでの緊張状態の中で、実に不快なことに、ぼくの心の動揺は言うなれば頂点に達していました。耳を澄ましても風がそよぐ音さえしません。ぼくは勇気を出して、ある実験をすることにしました。扉を開け、ステンシル伝令官<sup>(25)</sup>のような大声で階段の手すり越しに、「そこにいるのは誰だ？」とどなったのです。応答なし。人の気配がない古い屋敷の中で、ぼくの声が響き渡っただけです。例の動きが再開されることもありません。要するに、ぼくの不快感にはつきりとした方向づけをするような、そんなことは何も起こらなかつたのです。こうした状況下では、一人で声を力いっぱいあげても無駄なことですが、とても不快なことに、その声の響きには人を失望させるようなところがありました。そのせいでしょうか、ぼくの孤立感次第に高まり、開けたままにしておいたは

ずの背後の扉が閉まっているのに気づくと、急に不安が募ってきました。それは退路を断たれるかもしれないという漠然とした不安です。できるだけ急いで自分の部屋に戻り、そこに朝方までじっとしていましたが、自分が監禁状態に陥ってしまったと思うと、本当に不安な気持ちになりました。

翌日の夜、あの裸足の年老いた同居人は戻ってきませんでした。とはいえ、その次の日の夜は、ぼくが床に就いて暗闇の中にいると——大体この前と同じ時刻だったと思います——が——またしても例の老人が屋根裏部屋から降りてくる足音をはつきりと聞くことになったのです。

今回はパンチを飲んでいたこともあって、敵を迎撃するための志気は、いやが上にも高まっていました。ぼくはベッドから飛び出し、火が消えそうな暖炉の前を通る時に火かき棒をつかみ、あつと言う間に玄関の広間に来ていました。この時には足音もすでに聞こえなくなっていたので、暗闇と寒さに志気をくじかれてしまいました。人間の姿をしていたのか、クマの姿をしていたのか、どちらか分かりませんが、黒い怪物の姿が見えた、あるいは見えたような気がしたのは、その時でした。その時の恐怖がどんなものだったか考えなくてもみてください。怪物は背中を壁に向け、玄関の広間に立ち、大きな緑がかつた二つの目をぼんやりと光らせながら、ぼくと向かい合っていました。ところで、ぼくは包み隠さずに告白しなければなりません、実はそこに皿や茶碗を陳列した食器棚があったのです



——もつとも、その時は気がつきもしませんでした。同時に、次のことも正直に言っておく必要があります。想像力をかき立てられていた点を考慮したとしても、このことに關して、ぼくが自分の空想の餌食えじきになつていたとは、どうしても思えません。というのも、まるで変身の始まりであるかのように、この亡霊は何度か姿を変えたあと、(ぼくには考え直したかのように見えたのですが)再び最初の姿に戻り、ぼくの方に向かつて進み始めたからです。勇気というよりはむしろ恐怖から本能的に、ぼくは手に持っていた火かき棒を亡霊の頭めがけて力まかせに投げつけました。そして、ガシャーンという物凄い音を聞きながら、自分の部屋に逃げ帰り、二重に扉に錠を下ろしました。それから一分ほどすると、あの恐ろしい裸足の男の階段を降りてくる音が再び聞こえ、その音は前回同様に玄関の広間で消えてしまったのでした。

前の晩の亡霊はぼくの空想ファンシーによる視覚上の幻で、単に食器棚の薄黒い輪郭とたわむれていただけかもしれません。また、あの恐ろしい二つの目玉は逆さに置かれた茶碗にすぎなかったのかもしれない。しかし、いづれにせよ、ぼくは火かき棒を思いつ切り投げつけ、本当に奇抜な言葉を使えば、「二つの目玉をぶんなぐって一つ目小僧にしてやった」<sup>(26)</sup>のです。そのことは壊れて粉々になった茶道具一式が証明してくれます。これらの証拠によつて勇氣と元氣を出そうと努めたのですが、どうしても駄目でした。こんなことでは、あの恐ろしい裸足の足音——階段の上から下までずっと降りながら、ひっそりした幽霊屋

敷の隅々まで、しかも草木も眠る丑三つ時に、時を定めて聞こえたドシン、ドシン、ドシンという足音——について、何かが分かったなどとはとても言えません。畜生め！何もかも腹立たしい。ぼくは意気消沈してしまい、夜になるのが怖くなりました。

夜の到来を不気味に告げるかのような雷鳴が聞こえ、気がめいるような鬱陶しい土砂降りの雨となりました。街路はいつもより早く静かになり、十二時になる頃にはわびしくパラパラと降る雨の音しか聞こえなくなりました。

ぼくはできるだけ居心地よくしていました。ローソクも一本ではなく二本に火をつけ、絶対に床には就くまいと思い、ローソクを手を持って今か今かと突撃に備えていました。というのは、もし屋敷の夜の無言を乱したものが肉眼で見ることのできるものであれば、この目で是が非とも見てやろうと決めていたからです。ぼくはそわそわして神経質になったので、書物に関心を移そうとしましたが、やつぱり駄目でした。部屋の中を行ったり来たりし、軍楽や楽しい曲を口笛で順繰りに吹きながら、あの恐ろしい足音が聞こえはしまいかと、時おり耳を澄ませてみました。しばらくして腰を下ろし、もったいぶって打ち解けなさそうな顔をしたウィスキー・ボトルの四角いラベルを見つめていると、「フラナガン社の極上モルト・ウィスキー」という文字が、異様で恐ろしい想念——ぼくの頭の中で互いに追いかけてこをしていた想念——の静かな伴走者のように見えてきました。

その間に周囲はさらに静かになり、さらに暗くなっていました。馬車のガタゴトという音

とか遠くの方で喧嘩けんかでもして騒いでいるような鈍い音とかが、聞こえるのではないかと耳を澄ませてみましたが、聞こえるのはただ、ダブリンの山々を越えて聞こえなくなつた雷鳴に代わつて、風が出てきた音だけでした。この大都市の真ん中で、ぼくと一緒にいるのは自然の女神だけ、そして神のみぞ知るあるもの、だけだと次第に思うようになりました。ぼくの勇氣は潮が引くように消えかかっていました。だが、今回は多くの人間に威勢をつけてくれるパンチ酒のおかげで、ずんぐりして肉がたるんだような裸足で、再び階段をゆくりと降りてくる例の足音に対し、なんとか図太い神経と固い決意とで対処できそうな気がしました。

ぼくはローソクを手に取りましたが、震えていなかつたと言うと嘘になります。部屋の床を横切るとき、その場しのぎに祈りの言葉を神様に発しようとしたが、聞き耳を立てるために急に立ち止まり、その祈りを途中でやめました。足音は相変わらないうち聞かえています。正直に言うと、勇氣を奮い起こして扉を開くまで、その前で数秒ためらっていたのです。ですが、いまましい例の音がやんだので、安心して階段の手すりの近くまで思い切つて進み出ました。すると、ぼくが立っていた階段の一、二段下のあたりで、この世のものと思えない物体によつて、床がドシンと強打されました。うわあ！ ぼくの視線がとらえたものは、動いていてはいませんか！ その大きさはゴリアテ<sup>(27)</sup>の足ほどもあります。灰色つぼくて重量感があり、垂れ下がるような重い感じでズシンズシンと一段ずつ降

りていました。ぼくが生きているのと同じくらい確かなことに、それは今まで見たことも想像したこともないほど大きな灰色のネズミでした。

「口を開けているブタを見て胸がむかつく者もいれば、ネコを見ただけで気が狂う者もいる」<sup>(28)</sup>——シェイクスピアはそう言っています。このネズミを見たとき、ぼくは正気を失いそうになりました。というのは、笑われるかもしれないませんが、この野郎は悪意に満ちた、まるで人間のような表情で、こつちをじっと見ているぞと思ったからです。こいつがぎこちなく動きながら、ぼくの両足の間あたりから顔を上げたとき、例の肖像画に描かれていた、あいつの悪魔のような目つきと胸くそ悪い顔つきとが融合して、目の前のぶくぶく太ったネズミの顔になるのが見えました——間違いありません。あの時もそう感じましたし、今でもそれを覚えています。

ぼくは言葉では説明できないような嫌悪と恐怖を感じて、再び自分の部屋へ飛び込み、向こう側にライオンでもいるかのように、かんぬきを扉にかけて錠を下ろしました。畜生め！肖像画も爺じいもくたばってしまえ！ぼくは心の中で、ネズミが——そうです、今しがた見たネズミめが、ネズミ野郎が——実は仮面をつけた悪魔で、何か夜の悪ふざけのために屋敷中をぶらぶら歩いているのだと思いました。

翌朝、ぼくは早起きして泥道をてくてくと歩いていました。他の用事はさておいても、とにかく有無を言わずにトムを呼び戻したかったので、手紙を投函しに行ったのです。

ですが、家に戻つてみると、留守にしていた学友からの手紙が届いていて、そこには明日帰ってくる予定だと書いてありました。ぼくの喜びはいやが上にも増しました。なぜならば、うまい具合に新しい部屋がすぐに見つかってしまいましたし、昨晚の半ば馬鹿げた、半ば恐ろしい出来事を考えると、今回の転居と親友の帰宅は特に嬉しいことに思えたからです。その晩、ぼくはディジェス通り<sup>(29)</sup>に借りた新しい住居に何の準備もせずに泊まり、翌朝は朝食のために幽霊屋敷に戻りました。トムは帰ってきたら即座に、この屋敷へやって来ると違いないと思つたのです。

ぼくの思つたとおり——彼はやつて来ました。彼の最初の質問は転居の主たる目的についてだつたような気がします。

「ありがたい！」準備がすべて整つたと聞くや、彼は熱弁をふるうかのように言いました。「君のためにも嬉しいよ。ぼくの方は、どんな考慮すべきことがあるかと、こんなひどい古屋敷では一晩だつて過ごす気になれないよ」

「古屋敷なんてクソくらえだ！」ぼくは恐怖と嫌悪が純粹に混ざつたような声で叫びました。「ここに住むようになってからつても、ひと時だつて楽しかったことはないじゃないか」と話を続けて、ついでに例のぶくぶく膨れたネズミの出来事を話してやりました。

「まあ、それだけのことなら」従兄のトムは、このことを問題にしないうで無視するふりをしながら、言いました。「あまり大して気にならないな、ぼくは」

「ああ、でも、あの目つき——あの顔つきはね、トム」ぼくも負けずに言い返しました。「君だつてあれを見ていたら、見かけとは違った何かがあるような、そんな気になつていたらはずだぞ」

「そんな場合、一番いい悪魔払いは強靱な猫を飼うことじゃないかつて、いつもぼくは思っているぜ」腹の立つような含み笑いを浮かべながら、彼はそう言いました。

「そんなことはいいから、君自身の体験を聞こうじゃないか」ぼくも辛辣な言葉を返しました。

このように挑発されて、トムは不安げに周囲を見ましたが、それはぼくが彼の非常に不快な記憶を呼び起こしたからに他なりません。

「じゃあ、聞いてもらおうか、ディック。ちゃんと話すからさ。畜生め！ でも、こんな場所で話していると、すぐ気分が悪くなりそうだ。もつとも、ぼくたちは頑丈な若者だし、今なら幽霊だつて手出しなんかできないだろうがね」

彼は冗談のような言い方をしましたが、それは真剣に計画されてのことだつたと思いません。その時ちようど、ぼくたちの女中<sup>(29)</sup>が部屋の間隙にいて、ひび模様の入ったデルフト焼き<sup>(31)</sup>の茶器類やディナー用の食器類を籠に詰めていました。やがて彼女はその作業を中断し、口と目を大きく開いたまま、こちらの話に耳を熱心に傾けるようになりました。トムが体験したことは、およそ次のような言葉で語ることができます——

「三回も見たんだぞ、ディック。確かに三回だった。あいつがぼくに何かひどい危害を加えるつもりだったことは間違いない。実際、ぼくは危なかったんだ。途轍もなくね。だって、すぐさま逃げたからよかったものの、たとえ他に何も起こらなかったとしても、いざという時にきつと理性が働かなくなっていたらどうからね。なんとか逃げ出せたのは、ホントにありがたいことだった。

この呪わしい騒動が始まった最初の夜、ぼくは寝る準備をしてから、あの場所をふさいでいる古ベッドに横になっていたんだ。考えるのもいやだなあ。ローソクの火を消して、寝てしまったように静かにしていたんだが、目はパッチリと覚めていた。でも、ちよつとしたことで胸騒ぎがしたけど、思考経路は楽しく愉快なことに方向に向いていたんだよ。

いずれにせよ、あそこで——寝室の向こう側にある、例のいまわしい、暗い壁龕へきがんで——怪しい物音が聞こえるぞと思つたのは、夜中の二時だったはずだ。まるで誰かがゆつくりと絞首刑用の縄を床の上で引きずり、持ち上げて、ぐるぐると巻き、またゆつくりと床の上に落とすような、そんな音だった。一度か二度ぼくは起き上がったけど、何も見えなかったね。で、壁板の裏にいるネズミどもに違いないって思つたわけさ。好奇心はあつたけど、深刻な感じもしなかったんで、数分後には監視するのをやめちまつたよ。

妙な話だが、こんな状態で横になっていると、最初は超自然なことなんか気に気づきもしなかったけど、突然ある老人が——かなり恰幅かつぶくがよくて、鹿毛色の化粧着のようなもの

をまとい、頭には黒い帽子<sup>(32)</sup>をかぶった、がっしりした老人が——ゆっくりとした堅苦しい動きで、寝室の向こう側にある壁龕から斜めの方向に姿を現わし、ぼくのベッドの足もとを横切り、左側の物置部屋に入るのが見えたんだ。あいつは脇の下に何か持っていて、頭を片方に少し傾けていた。そして、その顔が見えたとき、うわあ！」

ここでトムはしばらく話をやめ、それからまた話を続けました——

「あの恐ろしい表情は死んでも忘れられんぞ。だけど、あれを見て老人の実体が明らかになったよ。あいつは右も左も向かず、ぼくのそばを真っ直ぐ横切って、そのままベッドの枕もとの近くにあつた物置部屋に入つて行つたのさ。

この何とも言えない、恐ろしい死と罪の化身が横切っている間、ぼくは自分が死体と化したみたいに、口も体も動かす力がなくなつたような気がしたよ。あいつが姿を消したあと何時間も、恐ろしさのあまり力が抜けてしまつて、動けなくなつちまつたのさ。翌朝、ぼくは明るくなるや、勇気を出して部屋を調べてみたよ。特に、恐ろしい侵入者が通つたように思える場所をね。でもね、誰かがそこを通つたことを示すような跡は全然なかつた。物置部屋の床に散らばつていたガラクタ類を第三者が動かしたような、そんな痕跡は一つもなかつたんだ。

それから、次第に少しずつ力を取り戻したんだけど、疲労困憊してしまい、とうとう熱っぽい睡魔に襲われちまつた。それで、起きてくるのが遅くなつたんだ。君が例の肖像画に



ついで見た夢のことで意気消沈しているのに気づいたんで、今では確信していることなんだけど、ぼくにも肖像画のモデルがはつきりと分かったから、自分が見た幻のことを君に話したくなかったのさ。実際、すべて幻覚だったんだと自分に言い聞かせようとしていたし、前の晩に頭に焼きつけられた呪わしいイメージが、また強烈によりみがえってくるのもいやだったんだ。つまり、自分が味わった苦しみを君に一つずつ詳しく述べることで、これまでずっと懷疑だった自分の立場を危うくしたりしたくなかったんだよ。

次の夜、幽霊の出る自分の部屋に行つて、同じベッドで静かに休むのは、実のところ少し度胸が必要だったね——トムの話は続きました。「そうするのに少し体が震えちまつたけど、別に恥ずかしいことじゃないさ。ほんのちよつとしたことでも、それが十分な刺激になつて、間違ひなくパニックに陥つていたはずだからね。でも、この夜は何事も起こらず、静かに過ぎ去つたよ。次の夜もまたそうだったし、さらに次の二晩か三晩も同じだった。次第に自信が出てきてね、ぼくは分光による幻覚<sup>(33)</sup>の理論の方を信じるぞつて、次第にそう思うようになったよ。もつとも、その理論によつて自分の確信に乗り、すべて幻覚なんだと思おうとしても、最初のうちは失敗したけどね。

実際、この亡霊はどこから見ても変わり種だったよ。こつちの存在なんか気にも留めず、すーっと部屋を横切つて行つたんだからね。ぼくもあいつの邪魔をしなかったし、あいつもぼくには用がなかったみたいだ。だったら、わざわざ目に見える姿で寢室を横切るよう

なことをして、いったい何になると言うんだ？ もちろん、人間の五感で識別できるような姿で寝室を通ることなく、あの壁龕に入り込んだ時みたい、今回もわざわざ寝室を通じて行かずに、たやすく物置部屋に入ることができたはずなんだよ。おまけに、いったい全体どうして、あいつの姿がぼくに見えたんだろうか？ 真つ暗な夜だったし、ローソクも暖炉も火はついていなかったのに、ぼくには色合いも輪郭も人間の姿以上にはつきりと見えたんだ。強硬症<sup>(34)</sup>の患者が見るような夢であれば、すべて説明がつくんだけどね。それで、ぼくが出した結論は何かというと、あれはやはり夢だったということさ。

狂言癖に見られる最も顕著な現象の一つは、だます相手としては最も考えられない人間に対して、すなわち自分自身に対して、故意的に嘘をつく回数が非常に多いということだよ。このことで、君に言う必要もないけど、ディック、要するにぼくは自分に嘘をついていたくせに、実に不快なペテン師である自分自身の言葉は、少しも信じていなかったんだ。だけど、ぼくは人間の習性として自分をだまし続けてしまった。単に同じことを繰り返すことで相手を疲れさせ、結局は信じさせてしまうような、粘り強いホラ吹きやサギ師みたいにね。で、ぼくはうまく自分を言いくるめ、やっぱり幽霊については懐疑論者なんだと思つて、悦に入つていたつてわけさ。

あいつが再び現われることはなかったよ。それは確かに慰めになった。結局、あいつとあの奇妙な古着や異様な顔つきが、ぼくは気になつていたんだろうか？ そんなことある

もんか！ あいつの姿を見ても平気だったし、いい話のネタを一つ儲けたわけだからな。というわけで、ぼくはベッドに転がり込んでローソクを消し、裏の路地で聞こえる酔っ払った夫婦の喧嘩に元気づけられて、ぐっすり寝ちまったよ。

ところが、この深い眠りからハツとして目が覚めたんだ。恐ろしい夢を見たからなんだけど、どんな夢だったかは思い出せない。心臓が激しく鼓動し、ドギマギしちまって、熱っぽい感じになってね。ぼくはベッドで身を起こしたまま部屋を見渡したよ。カーテンのな窓を通して、月の光が洪水のように一杯あふれて射し込んでいたけど、何もかも前に見たとおりで、裏の路地で聞こえていた夫婦喧嘩は、ぼくにとって不運なことに鎮まっていた。でもね、陽気な男が一人、家路に就きながら、「マーフィー・デラニー」<sup>(35)</sup>という当世人気のあった滑稽な歌を口ずさんでいるのが聞こえたよ。この気晴らしを利用して、ぼくは顔を暖炉の方に向けながら、目を閉じて再び横になり、聞こえてくる歌以外のことは考えないようにしたんだ。だけど、その歌も次第に遠ざかって聞こえなくなっちゃったよ。

元氣いっぱいの剽軽者<sup>ひょうきんもの</sup> マーフィー・デラニー

酒をいっぱい飲むのに、行き先は場末の居酒屋

樽酒いっぱい詰め込み、出てきたときは千鳥足

元氣いっぱいの白爪草<sup>シヤムロツク</sup>、酔いっづれて猪突猛進<sup>(36)</sup>

歌っていた男の状態も、おそらく歌の主人公と似たりよったりだったと思うけど、この男がすぐに遠ざかってしまい、ぼくの耳を楽しませてくれることもなくなっちゃった。歌声が消えたんで、うつらうつらしてしまっただけ、それはさわやかな眠りでも深い眠りでもなかったよ。どういうわけか、その歌が頭の中に残ってしまっただけ。ぼくは当てもなくさまよいつつ、尊敬すべき同郷のマーフィー・デラニーと同じ経験をする事になったんだ。つまり、「場末の居酒屋」から出てくるや、そのまま川にドボンと落っこちて、そのあと釣り上げられて検死陪審員たちに審理されたまではよかったが、土左衛門は「扉の釘<sup>ドアーネイル</sup>みてえに死んで<sup>デッド</sup>、はい、一卷の終わり」<sup>(37)</sup>って、みんなヤブ医者からそう聞かされ、そのとおりの評決を下しちゃった。ところが、その時に土左衛門が意識を取り戻したんで、陪審団と検死官との間に押し問答、というか大激論が勃発し、元気いっぱい、楽しさいっぱいの中で、歌の締めくくりになったってわけさ。

この流行歌の一本調子にはうんざりだった。文字どおり最後の一行まで、ゆっくりと進んで行き、そしてまた初め<sup>ダ・カーボ</sup>から——意識が朦朧として苦しい状態だったんで、どのくらい続いたかなんて分かりやしない。でもね、最後の最後には、気がつく、「扉の釘みてえに死んじまった、はい、一卷の終わりだよ」って、ぼくはぶつぶつ言っていたよ。ぼくの内なる、何かもう一つの声みたいなものが、非常にかすかな、しかしながら、鋭い調子で「死んだ！ 死んだ！ 死んじまった！ 死んじまった！ 主の慈悲があらんことを！」って言っているよ

うで、ぼくはたちまち目が覚めちまい、枕もとからすぐ目の前を見つめていたってわけさ。それで——信じるかい、ディック？——あの呪わしい人物がすぐ前に立ち、ベッドから二ヤード<sup>(38)</sup>と離れていない場所で、石のように冷たい、悪魔みたいな顔をして、ぼくをじつと見ていたなんて」

ここでトムは話をやめて顔から冷や汗を拭きました。ぼくは気分がひどく悪くなり、女中の顔はトムと同じように真っ青でした。ハラハラドキドキの体験をした現場で、ぼくたちは額を寄せ合っていたので、家の外が真昼のように明るくなり、往來の雑踏が始まったことを皆一様に喜んでいたに違いありません。

「はつきりと見えたのは三秒ほどだった。それからぼやけてしまったが、ずいぶんと長い間、それまであいつが立っていた場所、つまりぼくと壁の間だけど、そこに黒ずんだ蒸気の柱みたいなのが残っていたよ。あいつはまだそこにいるはずだと思ったね。でも、かなり時間が経ってから、この幻影も消えちまった。それで、ぼくは衣類を下の玄関の間へ持って行き、そこで扉を半分ほど開けたままにして着替えをし、それから往來へ出て行って、ずっと街中を歩いていたってわけさ。朝になって帰宅した時は、不安と疲労で見るとも無惨な状態だったよ。ぼくは馬鹿だった。どうしてそんなに取り乱してしまったのか、恥ずかしくて君に話せなかったんだから。君に笑われると思ったんだよ。特に、ぼくはいつも哲学めいたことを話し、君の幽霊話を軽蔑していたからな。結局、君に話せば容赦な

く逆襲されるだろうと思ひ、それでぼくの怪談は自分の胸の内にしまっていたというわけさ。

ところで、ディック、この最後の体験以降、ぼくはもう夜は自分の部屋へ戻らなくなつたんだ。ホントの話なんだけど、信じてくれないだろうね。君が自分のベッドに戻つたあと、ぼくはしばらく居間で起きていて、それから忍び足で玄関の扉まで行き、そのまま外出して、「ロビン・フッド」亭<sup>(39)</sup>で最後の客が帰るまで、じっとしていたものさ。そのあとは、番兵よろしく朝まで街路をゆつくりと歩きながら、夜の時間を過ごしていたんだよ。

結局、一週間以上もベッドの上で寝ることはなかった。「ロビン・フッド」亭の長い腰かけで居眠りすることもあれば、日中に椅子に座つたまま昼寝をすることもあつたけど、いわゆる普通の睡眠はまったく取れなかつたよ。

別の家に移ろうと決意を固めていたのに、移る理由については君に話す気になれず、なぜか一日また一日と、話すのを延ばしてしまつたわけだ。こんなふうにもたもたしている、ぼくの生活は刻一刻と、警察に追われる凶悪犯の生活みたいに、みじめなものになつてしまつたよ。こうした悲惨な生活ぶり、完全に具合が悪くなつちまつたのさ。

ある日の午後だつたか、ぼくは一時間でいいから君のベッドでぐっすり寝てやろうと思つた。自分のベッドはいやだつたんで、あの不吉な部屋には二度と入らなかつたよ。でも、

ぼくが夜その部屋にいないという秘密を女中のマーサに知られるといけなから、ベッドを乱すために毎日こつそり忍び込んではいたんだが。

運の悪いことに、君は部屋に錠を下ろして、鍵を持って行ってしまった。それで仕方なく、いつものように寝具を乱して、ベッドで寝ていたと思えるようにするために、自分の部屋へ行ってみたよ。ところが、いろんな状況が重なり合って、その晚ぼくが体験することになる恐ろしい事件が起こっちゃったんだ。まず、ぼくは疲労困憊していて、死ぬほど眠かった。それから、この極端な疲労が神経に及ぼす影響たるや、さながら麻薬のそれに似ていて、その頃にはぼくの習慣となっていた、興奮が伴うような恐怖を——そんな状態ではなければ、おそらく感じていたはずの恐怖を——感じなくなっちゃっていた。でもね、窓が少し開いていて、部屋には心地よい新鮮な空気が充滿して、さらには楽しげな陽光で部屋は実に心地よくなっていたよ。こんな場合にだよ、疲れていたぼくが一時間ほど昼寝をせずにすむわけないじゃないか。あたり一面に賑やかな生活の雑音が響き渡り、部屋の隅々まで現実世界の明るい陽光が満ちていたんだからね。

ぼくはほとんど抵抗できない睡魔に——不安を抑えながらも——負けてしまい、コートを脱いで幅広のネクタイをゆるめただけで、倒れ込んでしまった。絶対に三十分以上は昼寝をしないぞって自分に言い聞かせ、ふかふかのベッドと布団と長枕を久しぶりに楽しんだっていうわけさ。

あれはひどく狡猾なやつだった。あの悪魔め、頭がぼーとしたままで寝る準備をしていたぼくに、注意を払っていたに違いない、絶対にね。寝不足で心身とも疲れ切って、ゆうに一週間分の睡眠が滞っていたのに、そんな状態でも三十分という時間限定の昼寝が可能だと思うなんて、ぼくはホントに間抜けだったよ。結局、死んだように、長く、夢も見ることなく寝ていたんだからね。

突然、ぼくは静かに、しかし完全に目が覚めたよ。それはハツとしたからでも何か恐怖を感じたからでもないんだ。もちろん君も覚えているだろうが、それは夜中もかなり更けたころ、そう二時頃だったと思うよ。長時間ぐっすり眠ることで生理的欲求が満たされた場合、こんなふうに人は突然、静かに、完全に目を覚ますものさ。

すると、暖炉の近くにある例のガタピシの古い長椅子に、一人の男が座っていたよ。背中をぼくの方に向けていたけど、見間違えるなんてことはあるはずがない。あいつはゆっくりと振り返ると、うわあ！ 悪意と絶望からなる胸くそ悪い表情を浮かべた冷酷な顔で、さも満足そうにぼくを眺めていやがった。その時はもう、あいつがぼくの存在を意識していることや、悪魔のような怨恨に駆り立てられていることは、疑いようがなかったよ。だって、立ち上がって、ベッドの脇まで近づいてきたんだからね。あいつはロープの先端を自分の首に巻き、もう一方の先端をぐるぐる巻いて、それを手にしっかりと握っていた。でもね、この恐ろしい危機に際して、ぼくは守護天使から勇気を与えてもらったんだ。



あの恐るべき亡霊に見つめられたまま、数秒間ぼくが立ちすくんでいると、あいつはベッドの近くにやって来て、今にもベッドの上に乗りそうに見えた。その瞬間、ぼくは亡霊と反対側の床にベッドから降りたけど、次の瞬間には、どんなふうにかは覚えていないが、玄関の広間に来ていたよ。

だがね、ぼくは金縛りはまだ解けていなかった。まだ「死の影の谷」<sup>(40)</sup>を通り抜けていなかったのさ。呪わしい幽霊はまだぼくの前の、階段の手すりの近くに立って、少し身をかがめ、ロープの端を自分の首に巻いたまま、もう一方の端で輪を作って、ぼくの首に投げるみたいに手に持っていやがった。こんなふうに悪意に満ちたパントマイムを演じながら、あいつは実にみだらな、何とも言えないほど恐ろしい笑みを浮かべていたんで、ぼくは正気を失いそうだったよ。実際に見て覚えているのはそれだけだ。気がつくとき君の部屋にいたっていうわけさ。

ディック、ぼくは見事に脱出できたんだぞ。そのことについては疑問の余地がない。この脱出で、ぼくは生きているかぎり、慈悲深い神に感謝するからな。こんなやつと向かい合って立つということが、生身の人間にとつてどういうことか、同じような恐ろしい経験をした者にしか想像できないだろうよ。ディック、ディック、ぼくは死の影に襲われ、血と骨の髄が凍る思いをしたんだぞ。もう二度と今までのような自分ではいられない。二度とね、ディック。絶対に！」

ぼくたちの——前にも言ったように、五十二歳になる——女中は、トムが話を続けている間は手を休め、あんぐりと口を開けたまま、黒いビーズのような小さい目玉の上の額に八の字を寄せ、時おり肩越しに盗み見しながら、少しずつ忍び寄っていました。それで、ぼくたちが気づいた時には、すぐ背後に立っていたのです。話の合間に、彼女は小声で真剣に何度も論評を加えていましたが、そうした論評や叫び声については、話を簡潔にするために省略させてもらいます。

「その噂についちゃ何べんも聞いたんじゃが」そのとき女中は言いました。「オラは今の今まで信じやせんかった。じゃがな、今となっちゃ、信じねえわけにはいくめえ。おっかさんは裏手の路地に住んどるんじゃが、ホンマに変ちくりんな話をいろいろ知つとるけえ、その噂も話してくれるはずじゃ。じゃがな、あの裏側の部屋で寝るなんてとんでもねえこと。おっかさんは、キリスト教徒たるもんが、あんな部屋で夜を過ごすのはもちろんじゃが、昼間だってオラが入りするのは、いやがとつたんじゃよ。おっかさんの話じゃ、あの部屋は絶対あの人が使つとつた部屋に間違いないえってことじゃ」

「誰の部屋だつて？」ぼくたちは同時に尋ねました。

「まあ、あの人の——老判事の——ハロックス判事の部屋に決まつとるじゃねえか。どうか神様、あの人の霊を休ませてくだせえまし！」こう彼女は言つて、不安そうに周囲を見渡しました。

ぼくは「アーメン！」とつぶやきました。「でも、あそこで死んだのかい、その老判事は？」

「あそこで死んだのかじゃって？ いやいや、あそこでっていうわけじゃねえ。確か、あの爺さんが首を吊ったのは、階段の手すり越しじゃなかったかね？ ああ、くわばらくわばら！ 切断された縄跳びの取つてが見つかったのは、あのアルコーヴのあたりじゃなかったかね？ ナイフについちゃ、うわあ、首を吊るのに縄跳びのヒモを結びつけた場所じゃなかったかね？ 縄跳びのヒモの持ち主は家政婦の娘だって、おつかさんはよく言つとりましたよ。それからつてももの、娘っ子がすすく育つことはなかったそうじゃ。寝てる時に突然ガバツと起きて、悪ムや恐怖に襲われちまったんじゃろうかね。よく夜中に金切り声で叫んどつたそうじゃよ。老判事の幽霊が娘っ子を苦しめとるんじゃろうつてことじゃった。首の折れ曲がった爺さんが出てこんように、娘っ子は喚わめいたり叫んだりしてたそうじゃ。それからつてももの、「ああ、旦那様、旦那様があたいに足をドンドン鳴らして、おいでおいでしとる！ かあさん、あたいを行かさんで、ああ！」って、金切り声で叫んどつたそうじゃ。で、かわいそうに、とうとう娘っ子は死んじまつてね。医者どもの話じゃ、原因は水頭症<sup>(4)</sup>だったそうじゃよ。そんぐれえしか分からなかったんじゃろうね」

「こういったことが起こつたのは、どのくらい昔のことなんだね？」と、ぼくは尋ねま

した。

「まあ、どうしてオラなんかに分かるんじゃね？」というのが彼女の返事でした。「じゃがな、ずいぶんと昔のことに違いねえ。だつてよ、齒が一本もねえのにパイプを口にくわえてた、その家政婦はもう婆さんじゃつたし、オラのおつかさんが最初に結婚した時にゃ、もう八十を超えとつたそうじゃからね。老判事がアツケなく最期を遂げた時にゃあ、その婆さんはホンマに胸がふくよかで、立派な服を着てたそうじゃ。それに實際の話、オラのおつかさんも今では八十に手が届きかけとるからな。あんなふうに娘つ子を恐怖で死なせただけでもヒデエことじゃが、さらにヒデエことに、あの冷酷な人でなしは、たいていの連中から、こんなふうに思われとつたんじゃよ。つまり、おつかさんが言つとつたんじゃが、あの哀れな娘つ子は老判事の子供だつたんじゃねえかつて。誰に聞いたつて、あいつはあらゆる点で悪党じゃつたし、アイルランドの国でとびきり有名な首吊り判事だつたんじゃからね」

「あの部屋で寝るのが危険なことは分かつたけど、そこから判断すると、あそこでは他の人たちにも幽霊が現われたという、そんな噂もあるんだらうね？」と、ぼくは尋ねました。

「そうじゃね、實際いろいろ取り沙汰されとつたんじゃけど——確かに、どれも変ちくりんな噂話じゃつたよ」彼女は答えるのに気が進まない様子でした。「もちろん、噂話が

ねえはずはねえ。二十年以上ずっと、あの人が寝てたのは、あの二階の部屋じゃなかったかね。生前たくさんの人間にしてたみてえに、あの人は最後に自分で自分を処刑しちゃったんじゃないが、それに使ったロープが準備されとったのは、あのアル、コ、ヴ、じゃなかったかね。死んじまってから、亡骸は同じベッドに横たわったまんま、そこで棺桶に入れられちゃって、検死が済んだあと、そこからペテロ教会の墓地まで運ばれたんじゃないやなかったかね。じゃがな、ニコラス・スペイトという人が、いとも簡単に厄介なことになっちゃったことについて、奇妙な話がいくつもあつてな。全部おつかさんが知つとるよ」

「それで、そのニコラス・スペイトについては、何て言われていたんだね？」と、ぼくは尋ねました。

「ああ、それについて、わけなく話せるだよ」

確かに彼女はとても不思議な話をしてくれました。ぼくはひどく好奇心をそそられたので、この機会をとらえて彼女の故老の母を訪ね、非常に興味深いことを詳しく聞き出しました。実際、ぼくが聞いた話を皆さんに語りたいたのは山々ですが、筆を持つ指が疲れてしまったので、先延ばしにせざるを得ません。しかし、皆さんがお聞きになりたいのですから、またの機会に最善を尽くしたいと思います。

皆さんに語ることはしませんが、この不思議な話を聞いたあとで、真偽のほどはどうであれ、邪悪な老判事が死んでからずっと、この屋敷がたびたび幽霊の訪問を受けていた点

について、ぼくたちは女中にいくつか質問をしました。

「ここに住んどった人たちやみんな、不幸な目にあつたんじゃよ」と、女中は話してくれました。「ここじゃな、いつも予想外の事故が起こつたり、人が急に死んだりして、みんな短命だったそうじゃ。ここを最初に借りたのは、ある家族で——名前は忘れちまつたけど——ともかく、二人の若い娘さんと父親が住んでたそうじゃ。父親の方は六十歳ぐれえじゃったかね。あの年齢じゃめつたに見られんほど、がっしりした健康そうな紳士だったそうじゃ。で、父親はこの不吉な家の裏側の部屋で寝とつたわけじゃ。ああ神様、オラたちに危害が及びませんように！ 案の定、ある朝のことじゃつたが、父親は体がベッドから半分はみ出してな、床の近くまでぶら下がって死んでたんじゃよ。頭はプディングみてえに膨れちまい、リンボクの実<sup>(42)</sup>みてえに真つ黒になつちまつてね。どうやら原因は発作だったようじゃ。腐ったサバみてえに死んじまつてたんじゃ。本人は何が原因だか分からんかつたじゃろうが、年とつた連中はみんな、この父親を恐怖で発狂させて殺しちまつたのは、老判事以外にや考えられんと言つとつたよ。いやはや、とんでもねえことじゃ！

しばらくしてじゃが、今度はな、ある年輩の裕福な御婦人が屋敷を借りましたんじゃ。その人がどの部屋で寝たかは知らんのじゃが、ひとり住まいじゃつた。いずれにせよ、あの朝のことじゃが、召使いたちは早めに仕事に降りて行つたそうじゃ。じゃが、その人は廊下の階段に座つて、ふるふる震えながら、まったく気が狂つちまつて、ひとりごとを言つ

とったそうじゃ。「私を行かさないで。彼を待つと約束したんですから」って言うばかりで、その人の召使いたちも友だちも、そのあとずっと何も聞き出せんかったということじゃ。「彼」っていうのが誰のことか、その御婦人の言葉からは理解できんかったんじゃが、この古い屋敷のことを知つとる人間で、その女の身に起こつたことの意味が分からん者は、もちろん一人もおらんかったじゃろうね。

それからまたのち、この屋敷が下宿の形で貸し出された時じゃけど、ミッキー・バーンという人が、奥さんと三人の幼い子供と一緒に、例の部屋を借りましたんじゃ。確かにオラは聞いたんじゃよ。バーンの奥さんは、子供たちがよく夜中にベッドで体を持ち上げられとつたつて、自分で言つとつたんじゃから。どんな力で持ち上げられとつたんか、それは分からんかったそうじゃがね。それから、子供たちは一時間ごとにビクツとしてな、金切り声をあげとつたそうじゃ。こいつは死んじまった家政婦の娘っ子と同じじゃねえか。で、とうとうある晩のこと、かわいそうにミッキーが（この旦那は時々こういふことがあつたんじゃが）一杯ひっかけたところ、何とまあ、真夜中に階段で物音が聞こえたような気がしたつて言うじゃねえか。酒が入つとつたこともあつたんじゃろうが、どうしたのか気になつて、自分の目で確かめに行かねえことにや満足できんかつたようじゃ。そこで、結局、奥さんが最後に聞いたのは、「ああ神様！」っていう旦那が叫んだ言葉だけじゃつたが、そのあと何かが転落したようで、その音で屋敷全体が揺れたそうじゃよ。案の定、旦那

那は入り口の部屋の下に続く階段に倒れとつたそうじゃが、どうやら欄干を飛び越えて頭から落ちたみてえで、くの字に首が折れとつたということじゃ」

そのあと女中は付け加えて言いました――

「ちよつと裏の路地まで行つて、ジョー・ギャビーをこつちにやりますすけえ、茶道具の残りを荷造りさせて、身のまわりの品をすべて新しい下宿に運ばせてくだせえ」

それで、ぼくたちは全員でさつそうと出て行きました。この不吉な屋敷の敷居をまたぐのも、これが最後かと思うと、全員が楽に呼吸できるようになっていたことは言うまでもありません。

さて、小説というのは、主人公をその珍しい経験を通してだけでなく、その世界とかなり距離を置いた所からも見るものですが、そうした小説の領域における昔からの慣例に従つて、ぼくはまだ多くのことを書き足すことができます。厳格な意味でのロマンスに登場する血と肉と骨を持った生身の主人公と普通の小説の作者との関係は、このレンガと木とモルタルでできた古い屋敷とその実話を記録する小生との関係と同じです。そのことに皆さんは気がつかれたに違いありません。従いまして、ぼくは義務の命ずるままに、この古い屋敷に最後に降りかかった災難を語ることにしましょう。それは簡単に言えば、こういうことです。ぼくの話が終わつたあと、二年間ほど自称ドゥールシュトールフ男爵という偽医者屋敷を借りていたそうで、彼はゾツとするような得体のしれないものをブランドー



漬けにして、その瓶を客間の窓にたくさん並べ、よくあるような虚偽の誇大広告を新聞にたくさん出していたそうです。この紳士は禁酒を美德の一つと考えていなかったようで、ある晩のことブドウ酒に酔いつぶれ、こともあろうにベッドのカーテンに火をつけてしまったのです。自分の体は一部を火傷しましたが、屋敷の方はすべて焼けてしまいました。のちに屋敷は再建され、しばらくは葬儀屋が店を構えていたそうです。

これで、ぼくは自分とトムの体験談について、いくつかの重要な付随事項と一緒に、話し終えたこととなります。お約束を果たしましたので、皆さんには「お休みなさい、よい夢を」と申し上げることにいたしましたしように。

## 【訳注】

- (1) ローマの詩人ウェルギリウス (Vergil) の『アエネーイス』 (*The Aeneid*, c.29-19.B.C.) の四巻二九三行からの引用。
- (2) 二人が勉強していたのはダブリン大学トリニティ・カレッジ医学部。大学の創立は一五九二年で、医学部の開設は一七一年。
- (3) ヘンリー八世はローマ教皇との長い争いの末、支配下から独立して、自らイングランド教会 (Anglican Church) の首長となり、教会を国家に従属させた。教義や聖職者の階級などにカトリックの要素を残している反面、プロテスタントの宗教改革の多くの面も含んでいる。
- (4) ダブリン城の南東角から南に走る通り。この通りの北東にトリニティ・カレッジがある。
- (5) 現在のカレッジ・クリーン (トリニティ・カレッジの西側) にある大邸宅で、ヘンリー八世によって解体された女子修道院の跡地に建てられ、十七世紀にはアイルランド議会在置かれていた。
- (6) ジェイムズ二世は一六八五年の兄王の死後に王位に就いたが、絶対王制の強化とカトリック優遇政策によって議会と対立し、八八年に王位を追われてフランスに亡命した。
- (7) 一六八七〜八八年にダブリン市長を務めたハケット (Sir Thomas Hackett) は、プロテスタントに対する残虐で野蛮な行為で知られ、彼らの多くが地所を捨ててイングランドに逃れた。
- (8) 建物の軒などを支えるため、壁の上方を壁面に沿って突出させた部分。

- (9) 変死の疑いのある死体を調査し、検死法廷において陪審員とともに死因を審理するもの。
- (10) ポルトガル原産の甘口ワインで、多くは深紅色。
- (11) 本来は冬至前後の天候の穏やかな二週間を意味し、昔はアルキュオン（ギリシャ神話上の鳥）が巣ごもりをすると考えられた。一般には平穏な時代、古きよき時代を意味する。
- (12) 彫像などを置くために壁面に作られた窪み。または壁が引っ込んで陰になった空間。
- (13) 『マクベス』五幕五場で、連続する恐怖に襲われ、その味を忘れてしまったマクベスが、夫人の死に際して発する言葉。
- (14) 劇の途中・終わりで演技者がそれぞれの位置で一瞬動作を止めること。
- (15) 桂冠詩人、ロバート・サウジー (Robert Southey) が一七九九年に出版した『詩集』に収められた「バークレーの老婆」(The Old Woman of Berkeley) からの引用。
- (16) 一八四二年にウィーン大学のロキタンスキー (Karl Freiherr von Rokitansky) が『病理学的解剖学』を発表して、唯物論が医学を席卷するようになった。
- (17) 神の啓示を認め、これに基づく宗教。反対は自然宗教で、奇跡や啓示を認めず、人間の理性と経験を基にする。
- (18) ネズビット「約束を守った花婿」の訳注(2)を参照。
- (19) 動植物の電気現象を研究する生物学の一部門。
- (20) 十六世紀の有名な船乗り、貿易業者、女海賊、政治家（本名 Grace O'Malley）。父親が貿易船を

持つアイルランドの西海岸で育ち、一族の長となって活躍し、身内の者がイングランドに捕らわれた時には、エリザベス一世に釈放を嘆願した女丈夫。

- (21) ウィスキーにジュース、ソーダ、水、ミルクなどを混ぜ、砂糖・香料などで味をつけた飲料。
- (22) 詩人・劇作家ダヴェナント (William Davenant) による『マクベス』の一六六四年の翻案にある魔女の親玉ヘカティ (Hecate) の歌への言及。
- (23) ナポレオン戦争の時にイギリスで流行した歌 (Brandy-O) の一節。
- (24) 政治・文芸を中心とした評論週刊誌。前身はステイール (Richard Steele) とアディソン (Joseph Addison) が主宰した『スペクテーター』(The Spectator, 1711-12, 1714)。
- (25) 五十人分に匹敵する音量を持っていたというトロイ戦争で活躍した伝令使。
- (26) 冒険小説(特に少年小説)の分野で知られるバラントイン (Robert Michael Ballantyne) の『変わりやすい風』(Shifting Winds, 1866) 十四章からの引用。
- (27) ペリシテ人の巨人戦士。ダヴィデによって殺された。旧約聖書の「サムエル記上」十七章四八〜五一節を参照。
- (28) 『ヴェニス商人』に登場するユダヤ人高利貸し、シャイロックの四幕一場の台詞。
- (29) オンジエ通りの東側に平行して走る短い通り。五番地に彫刻家ホーガン (John Horgan, 1800-58) が住んでいた。
- (30) ヘーベーはギリシャ神話のゼウスとヘラとの娘で、ヘラクレスの妻。初めはオリンポス山で神々

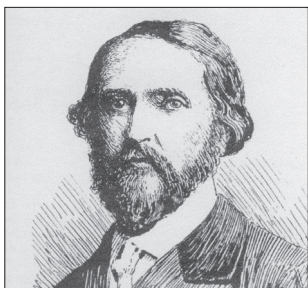
の酒宴の給仕であった。

- (31) 十五世紀末頃からオランダで焼かれ始めた軟質の錫釉陶器すずゆうに似せた英国産の陶器。
- (32) 死刑宣告のとき裁判官は黒い帽子（小さな四角の布）を頭に載せた。
- (33) ディケンス「殺人裁判」の訳注(3)を参照。
- (34) 外部から与えられた姿勢のまま感覚がなくなり、筋肉が硬直した状態が続くのが特徴。
- (35) 「黒く瞳のスーザン」(Black-Eyed Susan) など、海の歌で有名な歌謡作家ディブディン(Charles Dibdin)の歌とされ、一八二八年の歌謡集に収録されている。
- (36) シャムロックはアイルランドの国章に使われる各種のママ科植物で、聖パトリックの祭日(三月十七日)に飾る。シャムロックはウイスキーとスタウト(ビール)で割った飲み物の意味もある。
- (37) 昔ドアの強化や装飾に打ちつけた大きな釘(door-nail)で、「死んだ」(dead)と頭韻を踏む比喩として、使用は中世の詩人ラングランド(William Langland)の『農夫ピアズの夢』(*The Vision of Piers Plowman*, ca. 1360-87)まじりかのみ。
- (38) ヤードは三フィート(約九一センチ四四ミリ)。
- (39) 十二世紀頃の伝説的英雄・義賊。緑色の服を着て仲間と一緒にシャーウッドの森に住んだ。
- (40) 死の影の谷は大苦難の時のたとえ。旧約聖書の「詩篇」二三章四節を参照。
- (41) 脳脊髄液が異常に貯留することにより、脳室が拡大した状態で、脳水腫ともいう。
- (42) バラ科の常緑小高木。十月頃に葉をつけ、果実は翌春黒く熟す。

## 【作品と作者について】

本邦初訳。原題は「オンジエ通りの不思議な騒動についての話」(An Account of Some Strange Disturbances in Aungier Street)。初出は『ダブリン・ユニヴァーシティ・マガジン』の一八五三年十二月号。一九二三年にベル社からM・R・ジェイムズの編集によって『マダム・クラウルの幽霊』(Madam Crowl's Ghost)の中に再録された。

シェリダン・レ・ファニユ (Joseph Sheridan Le Fanu) は一八一四年にダブリンの高貴な家に生まれた。祖母と大伯父は劇作家であり、姪のローダ・ブロートン (Rhoda Broughton, 1840-1920) は小説家。ダブリンのトリニティ・カレッジで法律を学び、一八三九年に弁護士試験に合格したが、法律の職業には就かずに、その年にジャーナリストになって、『ダブリン・イヴニング・メール』という新聞の刊行を始めた。一八六一年に『ダブリン・ユニヴァーシティ・マガジン』の経営者となり、この雑誌の編集を一八六九年まで続け、そこで自分の作品の多くを連載した。一八四三年にスザンナ・ベネット (Susanna Bennett) と結婚したが、妻は十五年後に死去。彼の方は一八七三年に生まれ故郷のダブリンで死んだ。



享年五十八歳。

レ・ファニユの作品は、言葉数が多く、くどくて難解だと言う批評家もいるが、プロットは巧妙で躍動的である。彼の幽霊物語は現代の恐怖小説の先駆けで、その特徴はいつも美德が勝利を収め、いつも超自然的な出来事の説明がなされるとはかぎらない点にある。彼はしばしば「アイルランド幽霊物語の父」と呼ばれ、ヴィクトリア朝のアイルランド小説家ではリーヴァ(Charles James Lever, 1806-72)の次に有名であった。吸血鬼を描いた中篇小説『カーミンフ』(Carmilla, 1872)はブラム・ストーカーの『ドラキュラ』(Dracula, 1897)に影響を与えたと言われている。

